

書 評

大西拓一郎（著）
『ことばの地理学—方言はなぜそこにあるのか』
大修館書店, 2016

小川 俊 輔（県立広島大学）

Takuichiro Onishi
Geolinguistics: the Reason Why Dialects Exist There.
TAISHUKAN Publishing Co., Ltd. 2016

Shunsuke OGAWA (Prefectural University of Hiroshima)

1. はじめに

本書は、長年、日本の方言研究を牽引してきた大西拓一郎氏（以下、筆者）の単著である。「ことばの地理学」とは耳慣れない言葉だが、従来の研究の枠組みで捉えれば、「方言学」と「言語地理学」である。

本書は、「定説」として学界に広く受け入れられてきた「方言圏論」や「北前船による方言の伝播」を正面から否定するなど、意欲的かつ刺激的な内容を含む研究書である。ただし、専門的な知識を持たない一般読者も楽しく読めるようにと記述・表現が工夫されており、版元の大修館書店によると、一般書店でも多くの読者に迎えられ、この種の研究書には珍しく、重版が予定されているという。また、日本経済新聞、毎日新聞、朝日新聞などの全国紙に内容紹介や著者インタビュー、書評が掲載されるなど、反響を呼んだ。構成は、以下のとおりである。

- 第1章 川をのぼった「言わん」の「ん」—方言と塩を運んだ川の道
- 第2章 もうけ話はことばを伝えない—サカイと海の道
- 第3章 せめぎ合いで変わった活用—山の攻防

- 第4章 太陽がノボラサッタ（お昇りになった）、花がサケル（咲くことができる）—山の思考
- 第5章 家に「おられる」父親との隔たり—敬語と家族制度
- 第6章 九州と東北のタケカッタ（高かった）—人口とことば
- 第7章 「おら、行くだ」と「おめえ、行くずら」—「いなか」のことば
- 第8章 なぜ方言はあるのか
- 第9章 ことばの地理学

第1章の前に「序『方言はなぜそこにあるのか』」が置かれ、第9章の後に、あとがき、事項・人名索引、語形索引がある。

第1章から第7章までは、その章で扱われる方言事象が章題に登場する。副題には、その方言事象の発生や変遷、分布を説明する情報が示されている（第2章は逆になっている）。第8章・第9章は、本書の書名の副題である「方言はなぜそこにあるのか」という問いに、言語地理学の方法・観点から答える章であり、やや抽象的な章題が付されている。

2. 本書の研究方法論上の特徴

本書の研究方法論上の特徴は、一口に言えば《歴史学、地理学、民俗学・文化人類学の知見を積極的に援用しながら、方言事象・方言分布を解釈する》点に求められる。第1章、第2章は交通史、第1章、第3章、第5章、第6章は最新の地理学（地理情報システム）の技術・知見、第5章は、民俗学・文化人類学の視点、成果・知見が導入されている。他方、第4章では、生活者の自然観に基づいて方言事象が説明されている。以下、具体的に見ていこう。

2.1 交通史の知見から方言分布を解釈する

第1章が対象とするのは動詞の否定辞である。山梨県の甲府盆地には西日本の方言形式である「ン」が分布しているが、周辺は東日本の方言形式「ナイ」であり、孤立している。その理由を、富士川の水路を通じて西日本から塩が運ばれた際、塩とともに西日本方言の「ン」が甲府盆地にもたらされた、と説明する。富士川の水路と塩の運搬の歴史については、遠藤秀男(1981)『富士川—その歴史と文化—』、宮本常一(1985)『塩の道』などの成果が踏まえている。同じように、他の章でも、あまり方言研究者や言語研究者が目を通さぬであろう様々な分野の研究書が、数多く紹介され、方言分布の解釈に利用されている。

第2章では北前船の航路、および同航路の運用前から利用されていた都→琵琶湖→敦賀→佐渡・松前と到る陸路と水路を併用するルートが示され、原因理由の接続助詞「サカイ」は、前者ではなく、後者の道を通して北陸・東北地方に伝播した、と説明している。ここでは、接続助詞の「体系性」の観点から、以上の結論が導かれる。

2.2 最新の地理学（地理情報システム）の技術を利用して方言分布を解釈する

近年、IT技術が進展し、誰もが使えるパーソナル・コンピュータが開発され、地理情報と方言分布との関係について、正確なデータ、画像に基づいた分析が行えるようになってきた。筆者は、15年以上前から、こうした研究の先導役を果たしてきた（大西、2003、2004、2007など）。

第1章と第3章では標高、第5章では市区町村別1世帯あたりの人数、第6章では市町村別人口密度および市町村別生産年齢人口比（15～64歳の割合）が地図に描かれ、その地図の上に方言の分布が記され、地理情報によって分布を解釈している。特に、市町村別生産年齢人口比による分布の解釈は、独創的である。

欧州では、地図を用いた方言分布の研究における地理情報システム(GIS)の活用は「常識」となりつつあるが、日本では、機器やソフトウェアの習熟に時間がかかる（と思われる）ためか、大西(2003、2004、2007)以降、なかなか後続の研究（者）が現れなかった。しかし、最近、地理情報システム(GIS)を用いた方言研究の方法論に関する博士論文が書かれた（峪口、2016）。今後、この方法による言語地理学的研究の進展が期待される。その際、本書は、よいモデルケースとなるだろう。

2.3 民俗学・文化人類学の知見の導入と援用

第5章では、父親に対する対者場面において、「今日はうちに、いるか」と言うときの「いるか」に注目し、「共同体のあり方に地域的異なりがあり、父親への尊敬語の現れ方を左右している」(p.103)と述べる。東日本は「同族集団制社会」、西日本は「年齢階梯制社会」と大まかに分類される、という民俗学・文化人類学の知見を紹介し、対者場面での父親への尊敬語が西日本に多く現れる理由を次のように説明する(p. 106)。

年齢階梯制社会では、年齢の近似した人たちが集団を構成する。そして、一定年齢になると自ら親元から独立するとともに、地域によっては親の世代も年齢が高くなると隠居屋へと離れていく。このことで家族であっても、年齢別集団に分かれていくことになる。所属する集団（共同体、社会）が異なれば、ソトの扱いになる。年齢階梯制社会では、親であってもソトの人なのである。（中略）ソトにあって年齢が上に位置する父親は、尊敬語の対象になるわけである。

以上のように、たいへん魅力的な解釈が示されているが、実は、この記述の前に「市区町村別1世帯あたりの人数」が地図上に描かれ、1世帯あたりの人数が少ない地域（＝年齢階梯制社会＝世代毎に同居する家族が分かれ、家族のサイズが小さくなる社会）と父親に対する尊敬語の分布域とが重なっていることが明示されている。民俗学・文化人類学の知見と地理情報システム(GIS)の技術とが組み合わせられた解釈が行われている。学際的であり、総合科学であるとも言える。

2.4 生活者の自然観から方言事象を解釈する

第4章では五箇山（富山県）における「太陽がノボラサッタ」、秋山郷（長野県）における「花が咲ケル」という方言事象が取り上げられている。いずれも標準語にはない形式である。前者の場合、擬人化された太陽が「有情物」と見なされ、「昇る」は「状態」ではなく「動作」的に表されている。しかも、尊敬語が用いられている点が注目される。太陽に対して敬語を用いているわけである。後者では、花が「有情物」として扱われており、花が自らの意志によって「咲ける」（咲くことができる）と表現されている。この章の結論部では、これらの表現について次のように説明している(p. 94)。

五箇山にしても、秋山郷にしても人間の暮らしをとりまく自然環境は厳しい。その中で環境と対峙するのではなく、一体化する自然観により、暮らしを成立させてきた。五箇山の太陽を主体とする対者尊敬語、秋山郷の自然物を主体とする可能表現は、その自然観を反映している。

自然を制圧するのではなく、自然と調和し、環境と共存することに日本文化の特徴が見いだせることは、古くから指摘されてきた。五箇山や秋山郷のことにその原点が見いだせる。このことを考えると、遠い縄文に思いを寄せないではいられない。

かなり思い切った記述である。読者の中には、戸惑う方もいるのではないかとも思う。それは、最近、

このような民俗学的な方言研究がほとんどなされなくなってきたからであろう。方言語彙を通じて方言使用者の自然観や世界観を記述・考察する研究は、柳田国男以来、連綿と行われてきた。しかし、伝統的方言語彙の衰退もあつてか、最近では、室山(2004)などの同氏による一連の著作や新井(2010)などを除き、まとまった研究成果はほとんど発表されていないのではないだろうか。本書を契機として、この種の研究が活性化することを期待したい。

3. 「方言圏論」批判

前章では、第1章から第6章を対象に、本書の研究方法論上の特徴を述べた。第7章は、文法論、文法史の方法論で記述されており、本書の特徴とは思われないため、割愛した。ただし、山梨、長野、静岡、愛知で使われる「ズラ」の成立過程について独自の説を提出している点は注目される。

本章では、第8章「なぜ方言はあるのか」、第9章「ことばの地理学」の内容について紹介する。この2つの章は、筆者が「方言がどのようにしてできたのか、同時に方言の分布がどのように形成されたのかという方言研究の究極の課題」(p. 26)と考える問いに直接的に答える章である。

第8章では、まず、共同体の中に新しい方言が生まれ（あるいは他の共同体から受容され）、その方言がその共同体の中で広がり、やがて、固有の分布領域（あるいは方言境界線）が成立する過程を模式図で示す(p. 152, 図8-1)。次に、長野県伊那諏訪地方における「桑の実」の方言形について、1968～1974年の調査結果と2011～2013年の調査結果を1枚の地図上に示し(p. 155, 図8-2)、共同体内において、新しい方言は「点描画のように、共同体の領域が埋められる」(p. 154)ように広がる場合があると述べる。そして、個々の変化が、どの共同体にどのように広がるかの把握は未解決の課題であり、「個々の事例について、さまざまな角度からのアプローチを積み重ねることが求められる」(pp. 157-158)と結ぶ。

第9章「ことばの地理学」では、柳田国男の「方言圏論」および柴田武の「周辺分布の法則」を批

判する。当初、評者はこの第9章を中心にしてこの書評を草すつもりであったが、先に、新井小枝子氏による書評が公にされ、この箇所について詳しい考察がなされていたため（新井，2018）、本稿では、2点のみ、評者の簡単な気付きを述べることにする。

筆者は、今や「方言圏論完全否定論者」であるかのように見られているが、そうではない。筆者が否定するのは、「①中心地で、②繰り返し新語が発生し、③その新語が水面に広がる波紋のように（地を這うように）周辺地域に広がる」という理論・理解である。つまり、「方言圏論」を全否定しているわけではない。このことについては、大西（2017a～d）で詳しく考察されているので、それらを参照されたい。

次に、「方言圏論」に対する批判・対案として、藤原与一が「方言周布論」を提案している（藤原1962）。これは、ことばが広まる際、地勢上の大小の交通路にしたがって、大言語路（幹線言語路）から小言語路（支線言語路）へと、順に筋道を追って伝わっていく、という考え方である。本書の中では言及がなかったが、筆者は藤原の「方言周布論」をどのように評価しているのだろうか。

4. おわりに

本書は面白い。一気に読める。そうさせる工夫を、筆者は随所で行っている。まだ読まれていない方は、是非、手に取って見てほしい。方言の不思議さ、面白さ、そして方言学、言語地理学の醍醐味が体験できるはずである。他方で、「読み物としての面白さ」が追究されたためと思われるが、詳細な説明を省いた断定的な記述が散見される。あるいは、推論の上に推論を重ねているような印象を持つ箇所がある。読んでいてそのような記述に出会ったら、筆者の学術論文を手にとると良い。より厳密な手続きに

よる考察、解釈が展開されているはずである。

それにしても、である。今回、本稿を草すために本書を読み返してみて、筆者の研究の射程の広さに驚かされた。歴史学、民俗学、地理学など方言研究の周辺諸科学の成果への確かな目配りがあり、かつ、最新のIT機器を使いこなしている。見習いたい。強いて足りないものを挙げるとすれば、現在、西欧のGeolinguisticsの大きな柱の1つである計量的（統計的）な方法による研究くらいであろう。

【参考文献】

- 新井小枝子 (2010). 養蚕語彙の文化言語学的研究 ひつじ書房
- 新井小枝子 (2018). [書評] 大西拓一郎著『ことばの地理学—方言はなぜそこにあるのか—』日本語の研究, 14(1), 42-49.
- 藤原与一 (1962). 方言学 三省堂
- 室山敏昭 (2004). 文化言語学序説—世界観と環境— 和泉書院
- 大西拓一郎 (2003). 方言学とGIS 富山大学人文学部GIS研究会（編）人文科学とGIS, pp. 61-66.
- 大西拓一郎 (2004). 地理情報システム(GIS)を利用した日本語研究 日本語学, 23(15), 18-28.
- 大西拓一郎 (2007). 地理情報システムと方言研究 小林隆（編）方言学の技法, pp. 135-177. 岩波書店
- 大西拓一郎 (2017a). 言語変化と方言分布—方言分布形成の理論と経年変化に基づく検証— 大西拓一郎（編）空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—, pp. 1-20. 朝倉書店
- 大西拓一郎 (2017b). 蛇の目と波紋—野草や小動物の方言を例に— 大西拓一郎（編）空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—, pp. 252-259. 朝倉書店
- 大西拓一郎 (2017c). 言語変化と中心性—経年比較に基づく中心性の検証— 大西拓一郎（編）空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—, pp. 323-341. 朝倉書店
- 大西拓一郎 (2017d). 方言形成論序説—言語地理学の再興— 方言の研究, 3, 5-28.
- 峪口有香子 (2016). GISによる言語地理学研究—『瀬戸内海言語図巻』との比較を通じて— 徳島大学大学院総合科学教育部学位論文.